ベルクソニスムと偶然性の問題

三宅岳史

はじめに

ベルクソンは、『創造的進化』第三章で、偶然性の概念を分析し、偶然性を即自的な存在ではないとしている。[1] ここから、認識論的には、偶然性は偽問題や錯覚の源泉として批判されることになるのだが、我々はまず、『創造的進化』に現れる偶然性という概念が、実は初期の著作から様々な文脈で現れていることを確認したい。次に、偶然性批判の核心がどこにあるのかを突き詰め、最終的に、偶然性の概念がベルクソン哲学から完全に抹消できるのか、という問題を考察することにする。

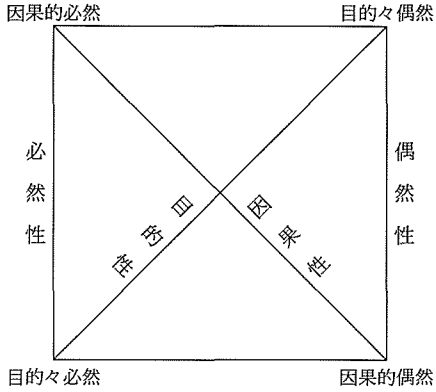
本論では、第一節で、ベルクソンの偶然性の概念を分析する導きの糸として、九鬼周造の『偶然性の問題』の分析を概観し、次節で、当時、偶然性の概念を中心にすえた哲学を打ち立て、ベルクソン哲学にも影響を与えたと思われるブトゥルーの哲学を扱いたい。そして最後に、偶然性がベルクソンの各著作でどのように現れるのかを辿ることにしたい。

一　二種類の偶然——偶然性概念の分類

本節では、まず議論を始める前に、偶然性概念の分類を行いたい。それというのも、偶然性という概念は、確率や因

果性、論理学といったさまざまな文脈において現れ、きわめて多義的な概念であるので、事前に整理をしておく必要があると思われるからである。『偶然性の問題』を著した九鬼周造が引用するように（cf. 九鬼、五九）、このことに関しては、ベルクソン自身も「偶然（le hasard）を定義しようと試みると精神は異常な揺れ動き（le singulier ballotte-ment）」（EC 235）を示すと述べている。ただし、さまざまな偶然性概念のうち、ここで問題になるものは、因果性と目的性に関わる因果的偶然（contingence）と盲目的偶然（hasard）という二つの概念にすぎず、本論もそれに絞って分析を行いたい。では、この二つの概念はどのような関係にあるのか。

まず九鬼周造は、「偶然とは必然性の否定であったから、因果的必然性と目的々必然性とに対して、そのおのおのの否定として、因果的偶然性と目的々偶然性との二つがあるはずである。」（九鬼、五三）と二種類の偶然性を規定する。



次にこの四つの概念の関係については、「およそ機械観はその徹底した形においては因果的必然性のみより認めない。したがって因果的偶然性の存在の余地はない。しかし、目的々必然性を否定し、その結果として、目的々偶然性を承認する。……それに反して、目的観が徹底的な形をとった場合には、目的々必然性によってのみ一切を説明しようとする。したがって目的々偶然性は存在しない。……この意味において、因果的必然性は目的々偶然性と結合しやすく、目的々必然性は因果的偶然性と結合し易い。」（九鬼、五五―五六）とされる。九鬼周造はこれらの結合を異種結合と名付け、目的観が徹底的な形をとった例としてはキリスト教神学などを挙げている。これに対して、目的々必然と因果的必然の結びつく徹底的な決定論や、因果的偶然と目的々偶然が結合した一義的な非決定論も考えられ、

九鬼はこれを同種結合と呼び、前者はストア派、後者はエピクロスの哲学を該当させている。ところで、先のcontingenceとhasardは、この図式に基づくと次のように説明される。

ライプニッツは偶然にcontingenceとhasardを区別した（Leibniz, *Opera philosophica*, ed. Erdmann, p. 763）。contingenceとは自由や自発性と一群をなすものとされているから、目的々必然と異種結合をしている因果的偶然と見て差しつかえない。またhasardは強制力や絶対的必然性と同類として取り扱われているから、因果的必然と異種結合をしている目的々偶然と見てよい。（九鬼、五八）

九鬼は、このような用語法を受け継いでいる哲学者としては、我々が次節で扱うブトゥルーを挙げているが、必ずしもこの用語法は一般に浸透しているわけではなく、ベルクソンもhasardを両方の意味に用いていること（cf. 九鬼、五九）を指摘している（後に見るように、contingenceも同様である）。確かにベルクソンは用語法にはこだわっていないが、この二つの偶然性を事柄としては注意深く分類している。このことは後に確認することにしよう。

二　決定論の侵食とブトゥルーの哲学

『偶然を飼いならす』の著者、イアン・ハッキングは、一九世紀初頭から始まりつつあった科学における測定と数学的定量化の重要性の増大をクーンの論文を引用して（cf. KUHN 220）、第二次科学革命と呼び、これこそが「社会の統計化」と「決定論の侵食（erosion of determinism）」（Hacking 1）を引き起こしたという分析を行っている。[2] また一方で、この数量化がエネルギー保存則の定式化を可能にし、決定論を広めたことを考慮に入れれば、この第二次科学革命と呼ばれる現象のなかで、決定論は「その興隆と崩壊とをほぼ同時に迎えるという、奇妙なドラマを演じた」（伊藤（一九九七）四四）と言えるのかもしれない。ハッキングは、この決定論の侵食の先駆者として、フランスの哲学者エミール・ブトゥルーの名を挙げている。そして我々にとって重要なことは、彼の哲学がベルクソン哲学に対して影響関

係があったということである。それでは、ブトゥルーがいかにして上で見た二つの偶然性を関係づけ、またどのように「決定論の侵食」を行ったのかを概観することにしよう。

ブトゥルーの哲学はどのような土壌のうえで成立したのだろうか。これに関して、ブトゥルーの著書『自然法則の偶然性』の訳者である野田又夫は、その訳書の巻末の解説で「十九世紀の科学的実証論を足場にして[3]、アリストテレス主義によって唯心論を展開するもの」（ブートルー、三一九）とその哲学的立場を説明する。これを敷衍すると、コントの数学から社会学までの実証主義的分類と「自然そのもののなかに生命や自由の萌芽を見出して連続的に人格的世界にいたろうとする」（同、三一八）ようなライプニッツの考え方が合体した哲学である、と言えるだろう。実際に、『自然法則の偶然性』では、必然性（量・抽象）、存在（質と因果性）・類（論理学）・物質（数学と力学）・物体（物理学と化学）・生物（生理学）・人間（心理学と社会学）という段階が分けられ、ブトゥルーはそれぞれの段階を分析していく。ここではすべてを検討する余裕はないので、存在と類の段階の議論を一部確認して、まず偶然性と決定論の関係について、次に二つの偶然性の関係についてどう論じられるのかを見ることにする。

まず存在（質と因果性）の段階で、ブトゥルーは現象間にある原因-結果の因果関係に必然性が成立するか、という問題を立てる。そして分析・演繹的必然、ア・プリオリな総合による必然、帰納の一般化による事実的必然という三種類の必然性をあげ、そのどれもが、実証科学においては絶対的には実現されないことが論じられる。その論拠の一部になるのは、実験が与えるのは非確定的な近似値でしかないこと、そしてたとえ現象が確定して見えるとしても、それは我々が粗視化を行うためであるということである。

> すべての実験的確証は、結局の所、諸現象の測定可能な要素の値を、できる限り近接する二つの限界内に狭めるということに帰着する。現象が事実上どこに始まりどこに終わるかという正確な点に到達することは我々には不可能である。……我々が見るのは、いわば事物の容器であって、事物そのものではない。その事物が容器の内に定まっ

た場所を占めているかは知ることができない。現象が或る程度、非決定的であって、その程度が我々の粗大な評価の範囲をどうしようもなく越えてしまっているならば、現象の外見は依然として我々の見たとおりと変わらないであろう。(CLN 24)

ブトゥルーは、このような測定の条件を持ち出し、量は質〔＝事物そのもの〕から抽象されるか、理想的極限にすぎないので、量は質そのものでないことを主張し、この質の非決定性を偶然性に直結させる。ブトゥルーはこのようにして、因果性が偶然性を受け入れる余地が生じることを示し[4]、決定論を掘り崩していくのである。

では、ブトゥルーはこの存在という段階で確保される偶然性を、どのような種類の偶然性とみなすのだろうか。まず、九鬼周造の言葉を借りて言えば、この偶然性は因果性の否定であるので、因果的偶然である。すると、この因果的偶然は、目的々必然と異種結合をしているのだろうか、それとも目的々偶然と同種結合をしているのだろうか。これを見るためには、存在の段階の一つ上である類（論理学）の段階を見なくてはならない。

まず、ブトゥルーは第三章「類について」のなかで、存在の段階と類の段階という段階間の結びつきが必然的でないか、また類の段階の内部の結びつきが必然的ではないか、という二つの問いをたて、いずれも結びつきは必然的とはいえない、つまり偶然であることを示す。そのうえでブトゥルーは、存在の段階の偶然性が、類の段階の秩序に導かれ目的性を受け入れる偶然なのか（contingence：因果的偶然と目的々必然の異種結合）、そのようなうえの秩序とはまったく無関係にただ盲目的に偶然であるのか（hasard：因果的偶然と目的々偶然の同種結合）[5]なのか、という問題を立てる。

これに対してブトゥルーは「ところで、原因は、それだけで捉えた場合、調和か無秩序かは無差別的である。すなわち諸々の原因は、放任しておけばただ相互に相争い合うばかりで、盲目的偶然（hasard）の生むのと同じ結果を生む。……しかしながら、原因が〔高次の原理の〕導き（une direction）をある程度まで受け入れるのであるのならば、概念〔類の段階〕の力は無効果ではない。」(CLN 42) という議論を展開し、物質や生物の秩序や調和のあるところにはそ

こに目的性や高次の導く力を認めるのである。ただし、この導く力は、ライプニッツの予定調和のように神が措定するのではなく、偶然性の只中から生じると考えられている。「論理的形式は、存在をいわば質料とする創造によって存在から生まれ出たのでありながら、今度は存在に働きかけ、いっそう深く存在に浸透することができる」(CLN 41) と述べられるように、ブトゥルーは法則の可変性や創発性まで示唆するのである。

このように、ブトゥルーは、因果的必然の否定と、因果的偶然と目的々必然の異種結合というこの二つの方針を、各段階に適用していく。結論部でも、まず、保存則が量的な近似でしかないこと、そして「故に存在の保存の法則は偶然的である」(ibid. 136) ことが示される。[6] 次に何かが必然的に保存されているだけでは階層的な秩序が生じないことから、保存則に加えて変化の原理が並置され、[7] この変化の原理が、hasard ではなく、contingence の原理であると結論づけられるのである。[8]

さてこれより後の一八九二年のブトゥルーの著作『現代の科学と哲学における自然法則の観念』では、この保存と変化という二つの法則が熱力学の第一法則（保存則）と第二法則（エントロピー増大の法則）[9] とに対応づけられる。[10] ここでは、ブトゥルーの保存則や決定論に関する考えが変化しているので確認しておきたい。

さて、一方で、摩擦などを除いた理想的な力学の段階では、エネルギー保存則から運動方程式を導くことができ、また初期条件を与えることができれば、全時間にわたり運動が決定され、このとき過去の出発点を忘れることはない（可逆性）。しかし、他方で、物理学のレベルに移り熱現象などを入れると、「仕事が存在するたび、熱の発生とともに初期条件の修復不可能な損失 (perte irréparable de la condition primitive) が起こる」(ILN 54) ので、現象は非可逆的 (irréversible) になってしまい、[11] これを法則で表そうとすると、或る状態から別の状態への推移は、「絶対的な正確さや厳密さをもって」(ILN 59) すなわち「必然的な連鎖」(ibid.) としては表せないことになる。そしてブトゥルーはこの二つの法則の関係を次のように整理するに至る。「保存則は抽象的な必然性の法則であって、[12] 決定論〔＝因果性〕

の法則ではない。一方で、クラウジウスの原理〔エントロピー増大則〕のような力の配分を決めるすべての法則は、決定論〔＝因果性〕の法則の一つであるが、それはもっぱら実験的な法則」(ibid. 58) に留まるので必然的ではない。[13]「決定論なき必然性か、あるいは必然性なき決定論か。ここには、われわれが閉じ込められるジレンマがある。」(ILN 59)

ここでは、『自然法則の偶然性』とは異なって、保存則は必然性とされているが、それが事物からの抽象であることには変わりはなく、因果的な力を剝ぎ取られる[14]一方で、曖昧だった変化の法則は、エントロピー増大の法則の非可逆性の分析を経て、必然性なき決定論すなわち因果的偶然性としてブトゥルーのなかで明確にされていくのである。

以上で、私たちは、ブトゥルーが実証科学に基づいて、測定や実験の概念を用いながら、逆に決定論を掘り崩していく過程[15]を概観してきた。もちろん実際にはこの非可逆性が客観的なものかはこのあと議論が続き、確かにこれだけで決定論が崩壊したとはとても言うことはできないが、ただ力学にミクロとマクロの違いや実験における非決定性を導入したことは、決定論の侵食を促進したと言うことができるだろう。

三　ベルクソン哲学における二つの偶然性

前節までで、我々は九鬼周造の偶然性の分類を用いて、ブトゥルーの哲学を概観してきた。ではブトゥルーのなかに現れる二つの偶然性概念は、ベルクソン哲学にどのように取り入れられ、改変されているのか。我々は、それを『意識の直接与件についての試論』以前の著作から『創造的進化』まで通覧することにしたい。それにより、偶然性というベルクソンによってときには厳しく批判されてきた概念が、ベルクソン哲学のなかでどのような位置を占めるかということを明らかにすることが本節の狙いである。

1　ルクレティウスと自然発生説――『意識の直接与件についての試論』以前の著作

ベルクソン哲学と偶然性の関係を扱うにあたって、ベルクソンが初期に残している哲学的論考「ルクレティウスの抜粋」に触れずにいることはできないであろう。九鬼周造の分類でも見たように、ルクレティウスやエピクロスは因果的必然も目的々必然も、ともに否定する因果的偶然と目的々偶然の同種結合、完全な非決定論、盲目的偶然hasardを擁護する哲学である。さて、ベルクソンのこの論文で偶然性概念がとりわけ強調されるのは、ルクレティウスに至る原子論の系譜でエピクロスの哲学が説明されるときであるが、興味深いことに、ベルクソンはそこで一種の宇宙生成論を取り上げている。

原子は左や右によったりわずかにそれたりする。これが傾斜運動（la *κίνησις κατὰ παρέγκλισιν* (*clinamen*)）を構成する。この傾向はいかなる法則にも従わず、予見されない。それは原子の気まぐれ（un caprice）である。……

それゆえ、たやすく世界の形成が説明される。原子は遭遇し、衝突し……回転や渦巻き運動を生じさせる。そこから原子の集塊が生じ、その各々が……世界をつくる。……

……大地はまず植物を生み、次に動物を生んだ。器官の驚嘆すべき配置に驚いて生物の産出を叡知的原因に帰すべきか。その必要はない。物質の法則が全てを説明してくれるから。というのも原子は常に運動し、絶えず離合集散するので当然無限の世紀の間に全ての可能な組み合わせを与えることに注目しよう。……偶然（le hasard）のみが他の無数の組み合わせと同様に、秩序といわゆる自然の知性を生み出したのだ。(Mél 281-282)

混同を避けるため、まずブトゥルーの説との違いを確認しておこう。偶然から秩序が出てくるところまでは同じであるが、ブトゥルーの場合、一旦できた秩序は、自律性をもち下位のレベルを導くのに対し、この場合、階層構造はすべてが原子に還元される点が異なる。非常に長い間の時間がたてば、あらゆる原子の組み合わせが尽され、この原子から動

植物が生まれ、知性をもつ人間や社会秩序ができるというエピクロスやルクレティウスの説を描くこの筆致は、ボルツマンの原子論やダーウィンの進化論を思わせて興味深い。実際に、この論文ではダーウィンとルクレティウスの類似について註で軽く触れられている。[16]

さて、主要著作を出す以前の講義（一八八七―一八八八）（『ベルクソン講義録』）のなかでは、この盲目的偶然と生物発生の問題がもう少し詳しく扱われている。そこでは、複雑な原子の組み合わせから有機体を誕生させる議論はすでに古代にエピクロスやルクレティウスにあったが、この生命に関する機械論的理論が科学的資料を根拠とし始めたのはビュヒナー、モレショット、ヘッケルらによって一九世紀になってからだと説明されている（cf. Cours I 340）。ベルクソンはここで、生物の自然発生説（une génération spontanée）を否定するパストゥールの実験と、それに対して「生物の発生は膨大な化学的条件を前提にしているので、偶然がこのような組み合わせをもう一度作り出すことはない」（Cours I 341）と偶然をもち出して自然発生説を擁護する主張を比較し、「パストゥールの研究に示唆を受けたすべての実験は、生物は生物からしか生まれず、有機体は先行する有機体をつねに前提とするという結論に導かれた」（ibid. 343-344）と確認している。

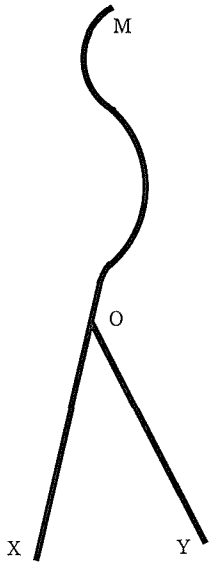
また、この『講義録』の同じ講義「生命に関する様々な考え方」で、盲目的偶然と対比的に、ブトゥルー[17]の思考していたような因果的偶然と目的々必然の異種結合が示唆され、「問題は物理・化学的法則のみが機能しているのか、有機体に似た何かを作り出したり保存したりするための上位の原理が関わっていないか」（ibid. 343）と述べられている。

以上のように、ベルクソン哲学の初期の段階ですでに、二つの偶然性の問題が、物理・化学と生物の階層性をめぐって表れている、と指摘することができるだろう。

2　自由と偶然性――『意識の直接与件についての試論』

以上で見たような二つの偶然性は、『意識の直接与件の試論』第三章の自由の議論のなかで、形を変えて現れているように思われる。また、この二つの偶然性の区別は、機械論と力動論という自然に関する形而上学の区別に対応している。機械論的な自由の図式は、目的性を欠き、因果的必然性からも解放された、因果的偶然と目的々偶然の同種結合として描かれるが、これは伝統的には無差別の自由と呼ばれるものに対応する。まずこちらの議論から見ていくことにしよう。

周知のように、ベルクソンは『試論』第三章で、自由の擁護者もその反対者も、ともに陥ってしまう空間と持続の混同の例として、三つの例を挙げて論じている。それらは第三章のサブタイトルとして、それぞれ「真の持続と偶然性(la durée réelle et la contingence)」、「真の持続と予見(la prévision)」、「真の持続と因果性(la causalité)」と名づけられている。機械論との関係で論じられる偶然は第一番目の議論で登場する。そこでは、「意識事象の系列MOを走破したあとで、O点に到達し、等しく開かれた二つの方向OXとOYを前にしている自我が表象される。」(DI 132-133)というように、ここでベルクソンは、図に描かれたXとYを無差別に選択できるという等可能性を偶然性と呼んでいる。そしてベルクソンはこの図式や記号化を、「自由についての真に機械論的なこの考え(cette conception véritablement mécaniste de la liberté)」(DI 133)と呼び、「果たされた行動の偶然性(la contingence)をそこに基礎づけると主張されたこの粗雑な同じ記号化が、自然な延長によって、その行動の絶対的な必然性を確立する」(DI 134)と主張する。すなわち、この図式化こそが、自由の擁護者と敵対者の論争を解決不能なものにするのみならず[18]、結局は、持続を空間化することで、真の自由を見失わせてしまうという、ベルクソン哲学の根本テーゼがここに関わっているのである。このように空間化され、



分岐された道を選択するという盲目的な無差別の自由としての偶然性は、『試論』では機械論と呼ばれるとともに、持続の空間化・記号化の一例として厳しく批判されるのである。

さて、もう一方の偶然性は、非常に目につかない形ではあるが、今度は因果性の議論のなかで、力動論あるいはライプニッツの哲学とともに姿を現す。今度は、この力動論の因果性は「自然のなかにまで偶然性（la contingence）をおくために……自由を擁護する（sauvegarder la liberté）」（DI 162）と述べられる。一体、先ほどの偶然性との違いは何か。それは、「この力動的な因果の考えが事物に我々と似た持続を与える」（DI 161）と呼ばれるように、この偶然性が持続のなかで現れることが根本的に異なるのである。

それでは、この力動的な因果のなかで現れる因果的偶然は、目的々必然と異種結合をすると結論づけてよいのだろうか。これに対する答えは、目的性が何を意味しているかで、異なってくる。それというのもベルクソンは、実体相互の機械的影響を否定したライプニッツの「決定論は、予定調和を認める必要性に起源があるのであって、因果関係の力動的な考えにあるのでは全くない」（DI 161）と述べるように、ライプニッツ哲学においては目的々必然が決定論の源であることを指摘するからである。これは、『創造的進化』第一章で徹底的な目的論としてライプニッツの予定調和説が批判されることの先駆的な議論だとみなすことができる。結局、徹底的な目的論も全てが与えられていることを想定している点で、逆立ちした機械論でしかなく、決定論に帰着してしまうのである。したがって、盲目的偶然を排しつつも、目的性と因果的偶然を直結させる議論に関しては、ベルクソンは慎重な姿勢を見せる。目的性概念よりはむしろ、常にそれが持続のなかで生成しつつあることが重要なのである。

そうとはいえ、同じく『創造的進化』で自らの立場を目的論に近いと述べるように、この偶然性が何らかの目的性の概念と関係があることは間違いないであろう。以上のように、『試論』のなかには、機械論的な偶然性と力動論的な偶然性がともに見出され、それはブトゥルーがhasardとcontingenceと呼んだものにほぼ対応する――『試論』で両方

ともcontingenceと呼ばれていても――と考えられるだろう。そしてそれは、より根本的には、空間のなかで現れる偶然性と持続のなかで現れる偶然性として区別されているのである。

3　物質と偶然性――『物質と記憶』

すでに『意識の直接与件についての試論』でも力動論の考えのなかに、ブトゥルーの物質の偶然性に類似した考えが、現れていることを注目したが、『物質と記憶』ではさらにその類似が前面に出ることになる。我々は、ブトゥルーが『自然法則の偶然性』における存在の段階で、計測を逃れるような微小な非決定性をもつ質を認めていたことを見たが、『物質と記憶』でも、まず物質の運動は「自身の存在をしばしば計算不可能なほどの多くの瞬間へ分かちつつある、いわば内部で振動する質そのもの」(MM 227) と呼ばれている。そしてこの物質の振動は、「より緩慢なリズム」(MM 228)、「細分化された持続」(MM 234) と呼ばれ、それどころか、「具体的な運動は意識と同様に自分の過去を現在へと継承発展させ、反復によって可感的な質を生み出すことができる」(MM 278) といった仮説までも示されることになる。現在への過去の流入である持続は、ベルクソン哲学においては、非決定性のメルクマールであるといえるが、『試論』では、物質どころか、有機体にも持続は保留されていた。ではベルクソンはブトゥルーのように、物質に目的々必然と異種連合した因果的偶然を認めるのであろうか。

『物質と記憶』の結論の最終部では「我々の持続と事物の流れのリズムの差は甚だしいので、最近の哲学によって非常に深く研究された、自然のプロセスにある偶然性は、我々にとっては必然性と等価なはずである。」(MM 279) と述べられている。白水社全集『物質と記憶』の訳註にもあるように[19]、この最近の哲学とはブトゥルーの哲学のことを指していると考えられる。ベルクソンは、このような権利上、あるいは潜在的に物質が持続やそれに伴う目的性をもつとしても、物質は事実上、必然的であるということを次のように説明している。「我々がすでに言ったように、この自然

〔物質〕は相殺され、したがって潜伏的（neutralisée et par conséquent latente）な意識、たまたま現れようと思ったまさしくその瞬間に、互いに妨げあって、消滅しあうような意識として考えることができる。」（ibid.）

したがって『物質と記憶』では、ブトゥルーの偶然性に接近する半面で、物質は権利上もっている目的性を相殺し合うことで剝奪され、盲目的な偶然に陥るという二面性をもたされていると整理することができるだろう。

4　偶然性への批判――『創造的進化』

我々はこれまで、ベルクソン哲学のいろいろな場面に、二つの偶然性が姿形を変えて現れるのを見てきた。しかし、これまでの分析をまったく無効にしてしまうかのような主張が『創造的進化』第三章で行われる。徹底的な無秩序への批判、そしてそれに伴う偶然性への批判である。九鬼周造が偶然性を必然性の否定で規定したように、偶然性のなかには否定の概念が入っている。そしてベルクソンが否定や無を含む概念――他には可能性概念など――を非常に厳しく自らの哲学から排除しようとしたことは知られている。偶然性のどのような面が批判され、何を目的として議論が進められているのかを見ることにしたい。

まず、無秩序とは、一方の秩序を期待したとき別の秩序にあったときの精神の失望や動揺を示すものであるにもかかわらず、無秩序が客観的に存在するように錯覚することから認識論上の誤謬が生じるというのが、ベルクソンの無秩序に対する基本的な批判である。[20] これは、「なぜ事物のうちに無秩序ではなく秩序があるのか」（EC 232）という解決不能の偽問題を生み出し、さらには秩序を無秩序なものに対して積極的なものとして知識を基礎づけるという、いわば基礎付け主義という認識論上の大問題を引き起こすからである。[21] このような無秩序に端を発する諸問題を生じさせないためには、相反しながら結びついている二つの秩序の区別をはっきりさせることが必要である。「『意志された』秩序と『自動的な』秩序の区別を明晰に思い浮かべた途端に、無秩序という観念を支えている両義性は雲散霧消し、それとともに

認識の問題の原理的な困難も消える。」(EC 232) ベルクソンはこの二つの秩序を「生命的なものの、意志されたものの秩序 (du *vital* ou du *voulu*)」と「惰性的なものの、自動的なものの秩序 (de l'*inerte* et de l'*automatique*)」(EC 225) と呼ぶのだが、これはそれぞれ力動論と機械論があてはまるだろう。

さて、それではこの批判に伴い、偶然性への批判はどのようになされるのだろうか。ベルクソンは、無秩序のときと同じく、偶然性の定義は二つの秩序の間を揺れ動き、「作用因も目的因も求められた定義を精神に与えることはできない。一方の定義は他方の定義へ差し戻すので、精神は、自らを固定することができずに、目的因の欠如と作用因の欠如を揺れ動く。」(EC 235) と指摘する。こうして偶然性は、他の秩序との関係ではなく、「それ自身の不在との関連で偶然的である」(EC 237) と見なされるようになり、「私はヒエラルキーの頂点に生命的秩序をおき、次に生命秩序の減少したものや複雑さの低いものとして幾何学的秩序をおき、その上に秩序が積み重ねられるような秩序の欠如、一貫性のなさ (incohérence) そのものを、最後にもっとも最下層におくだろう」(ibid.) ということになる。

ベルクソンはこれに対して、偶然性が根底にあってそこからさまざまな偶然性の度合い (des degrés) をもった幾何学や生命の秩序が出てくると考えるべきではなく、まず二つの秩序があって、その間の揺れ動きから偶然性がでてくると考えるべきだと述べる。[22] これは偶然性のなかから秩序が現れてくるブトゥルーの哲学を正面から批判し、実在的なものとしての偶然性を自らの哲学から追放しようという試みのように見える。しかしながら、はたしてそうなのであろうか。

まず、ベルクソンの偶然性批判の最初にあるのは、目的性の否定と因果性の否定を精神が揺れ動いた結果、秩序の根底に偶然性をおくというステップである。ここで批判されている偶然性とは、二つの秩序の否定とされることから分かるように、因果的偶然性と目的々偶然性の同種結合としてのエピクロス的な自由な原子の運動からダーウィン的な進化論が出てくるような偶然性である。したがって、ここにベルクソンの偶然性批判の核心があり、ブトゥルーの盲目的偶

然（hasard）への批判と軌を一にしていると言えるだろう。

次に、ベルクソンはこの根底に置かれた偶然性が、二つの秩序の区別を曖昧にし、それらの秩序の相反する関係を解体するというステップを批判する。すなわち、この批判は幾何学的秩序と生命的秩序を判別し、とりわけ生命的秩序の反転（inversion）や中断（interruption）が幾何学的秩序であることを示すのを狙いとしている。[23] すると、このことはまた、生命的秩序の特性を守り、幾何学的秩序に還元するのを防ぐという点で、目的々必然（ただしベルクソンは目的性については慎重な態度を示すが）を擁護したブトゥルーの考えと根本的な相違はみられないと思われる。

ただし、ブトゥルーが目的々必然と因果的偶然を異種結合させるのに対し、『創造的進化』では、二つの偶然性を否定して、両者を二つの秩序へ、すなわち因果的偶然を目的々必然（あるいは生命的必然）へ、目的々偶然を因果的必然へと還元させてしまうように思われる。それでは、『創造的進化』に至って、ベルクソン哲学は、因果的必然と目的々必然の必然性の同種結合、九鬼周造の分類ではストア派の決定論[24]――に行き着いてしまったのだろうか。

しかし、『創造的進化』の宇宙生成論が、必然性の同種結合とはむしろ正反対の印象を与えるのは明らかである。おそらくポイントは、『創造的進化』第一章でも考察されるように、目的性にあるといえるだろう。この目的々必然あるいは生命的・力動的な事象系列のなかには、『試論』でみたように、持続における偶然性が含まれている。そうすると、この生命的秩序は、目的々必然の秩序というよりも、すでにそのうちに非決定性という名の因果的偶然を孕んだ、目的々必然―因果的偶然の異種結合の秩序ということができるだろう。そしてこの秩序が単なる目的性にとどまらないのは、この用語にベルクソンがたびたび違和感を表明している通りである。

第一の秩序に関しては、それはおそらく目的性の周りを揺れている。しかし目的性によって定義はできない、というのもこの秩序はあるときは目的性以上であり、あるときはそれ以下だからである。……創造的進化として見られた、生命の総体は、前もって考えられた、考えられうる観念の実現によって目的性を理解する場合には、それをこ

えている。……反対に、個別に捉えられた生命のかくかくしかじかの現れに対しては、目的性は広すぎる。とにかく、ここで我々が論じているのは生命的なものである。(EC 225)

ベルクソンがおそらく言いたいのは、生命的な秩序が、前もって与えられた調和であるよりも、その調和を生み出していくプロセスであること、すなわち秩序そのものであるよりも秩序の条件であることである。このように考えると、我々は、創造的進化が、まさしくブトゥルーの秩序の創発性や可変性といった考えを本質的に継承していることを看取できる。そして、この生命の秩序が持続を物質に押しつけるため、物質もたんに因果的必然性にとどまるのではなく、偶然性を示すようになるのである。

では、ベルクソンとブトゥルーの偶然性概念の違いはどこにあるのだろうか。まずブトゥルーが、物理学は力学に還元できず、ひいては物質が偶然性をもち、目的性を受け入れることを強調することは、先に見た。ベルクソンも、物質がたんに必然的決定論に従うのではないという点では同様だと思われるが、ここでまさに物質が歩む方向が問題になる。『創造的進化』では、エネルギーの散逸により物質はそのままでは目的性に向かうことなく、まったく正反対の質の低下と因果的必然へと落ちていくことをベルクソンは強調する。生物の目的性に対して物質は障害となり、しかも「生命には物理変化をカルノーの原理で決まる方向から逆転させる力はない」(EC 246) のである。すなわち、ブトゥルーが物質を目的々必然と因果的偶然の異種結合で、物質が目的性を受け入れる余地を残している点を強調するのに対し、ベルクソンは物質がそれだけでは、目的々偶然を示し、因果的必然へと低落していくことを強調するのである。ここでは、『創造的進化』においてエントロピー概念の導入が深く影響していると指摘できるであろう。

むすび

さて我々は、長い間ベルクソンの偶然性批判を見てきたが、最後に、ベルクソニスムから偶然性は完全に抹消できる

のかということについて考えたい。第一にcontingenceとhasardという二つの偶然性は、認識論的な問題としては批判されるにもかかわらず、以上で見たように、事柄としては、物質と生命の秩序のなかにそれぞれ取り込まれ、創造的進化の宇宙のなかで重要な役割を果たしていると思われる。

したがって進化に偶然性の果たす役割は大きい。たいていの場合、適応した、あるいは発明された形態は偶然的である。どのような時と場所で障害に遭遇したのかによって、原初的な傾向から、進化の系統を創るかくかくしかじかの相補的な傾向への分離も偶然的である。停止や後退も偶然的である。適応もかなりの程度偶然的である。二つのことのみが必然である。1．エネルギーの漸進的蓄積、2．このエネルギーを柔軟な経路に入れて、その出口に自由行為がある可変的で非決定的な方向へ流すこと。(EC 255-256)

ここでは、非決定性という名のもとに因果的偶然性が、生命的必然性に分離不可能な形で結びつけられていることが看取される。このように、生物の因果的偶然と目的々必然の異種連合は、生命的秩序の創発性として、エネルギーの蓄積とその非決定的な方向付けというように、ベルクソン哲学のなかで分節化されていくことになる。また、物質や幾何学の秩序でも、「見かけは積極的な性質のなかにある消極的な体系（système de négations）」(EC 209) というように、目的々偶然が因果的必然と不可分に結びつき、ベルクソン哲学のなかで非常に大きな役割を果たすことは容易に指摘できるだろう。[25]

第二に、『創造的進化』において、一方で幾何学的な秩序とは、物質が散逸した果てに到達するとされ、物質はそこを目指すが、決して到達しないとされるような極限概念であった。それは、『創造的進化』の枠組みにおいては、持続が上りのリズムを物質に押しつけるため、下りのリズムをもつ物質は幾何学的秩序に到達しえなくなるからである。また他方では、エラン・ヴィタルはエネルギーを蓄積して解放することで、無限に多様な仕事の完成を、「一気に（tout d'un coup）獲得しようと望む」(EC 254) が、エランが有限であるために、物質の抵抗にあい、それは不可能とされる。

ゆえに、ここでは、どちらの秩序も完全に自らを実現することはできない。ここで重要になるのは、以上の二つの秩序が衝突するということである。ここには、目的々偶然（その裏の因果的必然）にも因果的偶然（その裏の生命的必然）にも回収されない、二つの秩序の衝突という何らか新たな偶然性概念（どのような時と場所で障害に遭遇するか）が顔を覗かしているとは言えないだろうか。そして、この裏には、なぜ我々のいるこの宇宙は二つの秩序の衝突する世界なのか、生成が破壊より優勢な宇宙ではないのか、エラン・ヴィタルは無限ではなく有限なのか、といった上位の偶然性に関わる問題がベルクソン哲学から消去されないまま残存していると言えるだろう。（この問題は、神々を作る宇宙の本質的機能に反抗的な我々の地球という『二源泉』の最後の一文にも残存している。）

このように、一九世紀末の「決定論の侵食」は、単なるエネルギー保存則による決定論的世界像からの解放を意味しただけではなく、ベルクソン哲学を複雑な目的性と盲目性のせめぎあいへともたらしたと言えそうである。ベルクソンは、「何も失われず何もつくられない」という保存則の公式から逃れる力を生物がもつと考えるかわりに、圧倒的な盲目性のなかに飲み込まれていく世界のなかに「分解されるものを横切って自己を生成する一つの実在」（EC 248）として生物を見なすようになったのである。

註

（1）「ひとつの秩序が偶然（un ordre est contingent）であり、また我々に偶然であると見えるのは、反対の秩序との関係によってである。散文が詩に対し偶然であり、詩が散文に対し偶然であるように。」（EC 233）

（2）もちろんハッキングは社会の統計化だけではなく、マクスウェル、ボルツマン、ギブスといった人たちの担った「統計力学は〈偶然〉と確率が、物理学だけではなく、形而上学まで広がるのに決定的だった。」（Hacking 8）と述べている。

（3）野田又夫は、ブトゥルーの科学的実証主義の展開について次のようにまとめている。「ブートルーの科学に対する理解と評価とは、前代同時代の科学論者をしのぐ広汎な思想史的展望のもとに適切に行われた。それは本書及びソルボンヌにおける講義『現

代の科学ならびに哲学における自然法則の観念』をみれば明らかである。フランスにおける科学特に実証論的考察、したがってまた歴史的研究は、このブートルーの試みのあとに、その刺激を大いに受けて、躍進をとげたのである。デュエムやポアンカレなどがそれである。これはブランシュヴィックの指摘した通りであると思う（ブートルー「デカルトにおける永遠真理について」仏訳、序文）。」（ブートルー『自然法則の偶然性』訳書解説、三二一―三二二頁）

(4) 「したがって存在の最も基本的な諸形式までも、現実存在そのものの不可欠の条件として何らかの質的要素が存在する以上、……具体的で実在的な世界では、いずれの場所においても、因果性の原理が厳密には適用できないと認めることである。」（CLN 26）

(5) ブトゥルーにおけるhasardの使用法は、一義的には目的々必然性の否定と言うことにあり、それが因果的必然と異種結合するか、因果的偶然と異種結合するかは、hasardが運命や気まぐれと同一視されることもあり、ブトゥルーのなかで厳密に決まっておらず、両義的であるように思われる。九鬼周造もライプニッツは異種結合と説明しているが、ブトゥルーに関しては、そのどちらであるか必ずしも言明してはいない。

(6) 「そうしてみると、『何ものも失われることなく、何ものも創られることなし』というかの古来の格言は絶対的価値をもたないことになる。相互に非還元的でしかもすべてが一様に永遠の昔から在るのではない諸々の世界のヒエラルキーが存在するというそのことが、上の格言に対する第一の背反である。そしてこれら世界そのものの内部において完成または衰退が可能であること、これが第二の背反である。」（CLN 139）

(7) 保存則と並んで、変化をおくこの発想は、スペンサーが力の保存則と並べて、進化の法則をおいたのと類似点が指摘されるだろう。ただし、ブトゥルーにあっては、この変化の原理は、質的変化の原理、絶対的変化の原理とも言われ、最終的には観察不可能な創造の原理という形而上学的なものへと帰着させられる。

(8) 「決定原因の系列中（la série de causes déterminantes）にある程度まで偶然性（la contingence）が支配するのではないならば、目的因の系列中（la série de causes finales）には盲目的偶然（le hasard）が支配することになるであろう。なぜならば、現象の継起のなかに或る程度の偶然性を導きいれるのはまさに目的性そのものだからである。……しかし実在の奥深く浸透するにつれて、質的決定性が増加し、同時に抽象的で宿命的な秩序の減少そのものと比例して、価値や効能や真の秩序が増加するのが見られる。そうすると、世界を動かす不可視だが存在している魂を、盲目的原因と同一視することができようか。」（CLN 143-144）

(9) ちなみに熱力学のこの二つの法則は、『自然法則の偶然性』のなかでは触れられていない。この著作における物質や生物の内容は、物質には熱素、生物ではラマルクやキュヴィエの法則が挙げられるなど、その後の『現代の科学と哲学における自然法則の観念』の内容からすると半世紀ほど古い。

(10) 「保存の法則に加えて、我々はクラウジウスの原理のような変化の法則を措く。」(ILN 58)

(11) ブトゥルーはこの非可逆性は、物理学が熱という質を扱うことによって生じたのであり、「したがって物理法則は力学法則に還元できない。それは新しい質という要素が介入するからである。しかしそれはスコラの質ではもはやなく、分化と異質性の要素なのである」(ILN 54) と述べる。

(12) ここでブトゥルーは、「力の保存則は科学にとって指導理念である。しかし、何ものもこの法則がそのものとして事物の本性に内在していることを確証するものはないのである。」(ILN 57) と述べ、保存則をそれに対応する客観的実在があるというよりも、科学的探究を進める一つの手段と見なしている。

(13) 必然性は「事物が別様にあることの不可能性」、決定論は「あらゆる様態とともに現象が今あるとおりに措定されるようにする条件の集まり (l'ensemble des conditions qui font que le phénomène doit être posé tel qu'il est, avec toutes ses manières d'être)」と定義されている。ここで用いられる決定論という用語は、あるものが別のものを引き起こす因果的な能力を示すだけで、必然性は含意されていないように思われる。(cf. ILN 58)

(14) ここで我々は保存則が因果性から切り離された定式を確認することができる。保存則が因果的決定論と直結することは、現代の我々の視点から見ると、明らかではないが、そのような分離を可能にする視点は熱力学第二法則の力学への非還元性が問題になってから、出てきたにすぎないことは注意する必要があるだろう。したがって、『試論』やそれ以前の保存則と決定論を結びつける議論を、保存則は因果的主張を含まないという批判を行うのは、現代からの回顧的な視点が入りこんでいるのである。

(15) ハッキングはブトゥルーのこうした議論の結果たどり着くのはパースの絶対的偶然の世界であり、「まったくの偶然としての進化過程において、法則が創発するという世界である (a world in which law emerge in an evolutionary process that is entirely contingent)」(Hacking 158) と述べている。

(16) 「このようにして現代科学は、原子理論より帰結を引き出し、その帰結を実験により検証することで、デモクリトス、エピクロス、ルクレティウスの仮説に輝かしい確証を与えるに至った。

他の点に関して、とりわけ生命の起源の問題に関しては、ルクレティウスがいかにして現代の偉大な理論の予感をもっていたかを示すことは容易である。第五巻で述べられている考えと、偉大な自然学者ダーウィンとの類似は一度ならず注目されてきた。我々はこの類似を記すに留め、力説はしない。生物変異説（le transformisme）は今日ではまだ一つの仮説なのだから。」（Mél 292）

(17)『講義録』第一巻では、ブトゥルーに関しては次のように述べられている。「現代の哲学者ブトゥルー氏は、非常な深遠さをもってして、自然法則は近似でしかなく、絶対的に真理であるような法則は存在せず、ある場合には、物理的条件が与えられても、物理的現象は言ってみれば躊躇し、ある仕方でも別の仕方でも無差別に生み出されることを示した。この点に関してこの考えを発展させるために、彼は『自然法則の偶然性』という題名の著名な本を著した。」（Cour I 259）

(18)「知らぬ間にあなたにつきまとっているこの粗雑な記号を無視すると、あなたは決定論者の議論が『行為は、一旦果たされてしまうと、果たされてしまったのだ』という幼稚な形をとり、その敵対者は『行為は、果たされる前には、まだ果たされていなかった。』と返答している。言葉を換えていえば、自由の問題はこの議論のあとでも手つかずのままなのだ。」（DI 137）

(19)　ベルグソン全集第二巻、『物質と記憶』田島節夫訳、二九三頁。

(20)「無秩序の観念とは、自らの必要としている秩序と異なる秩序、当面自分に関わりのない、その意味では自分にとって存在しない秩序を前にした精神の失望を、言語の便宜上、客体化したものだろう。しかし、この観念は理論的な使用にはたえないだろう。あえてそれを哲学に導入するなら、その真の意味はまちがいなく見失われるだろう。」（EC 223）

(21)『創造的進化』第三章の狙いの一つは、科学が基礎づけをしなくても上手くいくことを進化論によって説明することにあるのだが、この点に関しては本論の目的外になるので扱わない。

(22)「まず一貫性のないものがあって、次に幾何学、生命があるのではない。もっぱら幾何学と生命があり、次に両者の間を精神が揺れ動いて一貫性のなさの観念がでてくるのである。無秩序な多様性がまず存在し、そこに秩序が付け加わると語るのは、正真正銘の論点先取を犯している。無秩序なものを想像することで、実は一つの秩序あるいは二つの秩序を立てているからである。」（EC 237）

(23)「この長い分析は、いかにして実在が緊張からひろがりへ、自由から力学的必然性へ、反転（inversion）という手段によって、移行するかを示すために必要であった。」（EC 237）このように、無秩序や偶然性の批判は、二つの秩序が相反的に結びつき、幾

何学的秩序が生命的秩序の反転であることを示すために行われている。

(24) この点に関しては、ジャンケレヴィッチがその著書の自由の章の最後で次のようにまとめているのが有名である。「さらに、このように考えられた自由は、プラトン、ストア派、スピノザが理解していたように、同時に無関心と決定論とのいずれにも対立する有機的な必然性であるといえよう。これが賢者の自由だ。」(HB 79)

(25) 「数学の秩序が積極的なものであり、物質に内在して私たちの法律と比肩するような法則があるとすると、私たちの科学の成功は奇跡によることになる。」(EC 220)

引用文献

BERGSON, Henri, DI : *Essai sur les données immédiates de la conscience*, «Quadrige», Paris : Presses Universitaires de France, 1997 (1889), 180p.

MM : *Matière et mémoire*, «Quadrige», Paris : Presses Universitaires de France, 1993 (1896), 280p. (ベルグソン『物質と記憶』(新装復刊版) 田島節夫訳、東京、白水社、一九九三年、三〇一頁。)

EC : *L'évolution créatrice*, «Quadrige», Paris : Presses Universitaires de France, 1996 (1907), 369p.

Mél : *Mélanges*, Paris : Presses Universitaires de France, 1972, 1692p.

Cours I : *Leçons de psychologie et de métaphysique*, «Épimétée», Paris : Presses Universitaires de France, 1990 (1999), 441p.

BOUTROUX, Émile, CLN : *De la contingence des lois de la nature*, 2e éd, Paris : F. Alcan, 1875 (1874), 170p. (ブートルー『自然法則の偶然性』野田又夫訳、一九四五年、東京、創元社、三三六頁。)

ILN: *De l'idée de loi naturelle dans la science et la philosophie contemporaines*, Paris : Société française d'imprimerie et de libraire, 1913 (1985), 143p.

HACKING, Ian, *The taming of chance*, Cambridge [England]; New York : Cambridge University Press , 1990, 264p.
伊藤邦武、『コスモロジーの闘争』、東京、岩波書店、一九九七年、二〇五頁。

JANKÉLÉVITCH, Vladimir, HB: *Henri Bergson*, 2e éd «Quadrige», 1999 (1959), 299p.

KUHN, Thomas Samuel, *The essential tension*, Chicago : University of Chicago Press, 1977, 366p.
九鬼周造、『偶然性の問題・文芸論』、京都、燈影舎、二〇〇〇年（一九三五年）、三五六頁。

（筆者　みやけ・たけし　関西大学非常勤講師／フランス哲学）

Le bergsonisme et le problème de la contingence

by
Takeshi MIYAKE
le professeur non titulaire
L'université de Kansaï

Dans *le problème de la contingence* Shuzoü KUKI définit la contingence comme la négation de la nécessité (p. 53), puis il remarque qu'il se trouve deux sortes de nécessité ; la nécessité causale et celle de la finalité, de sorte qu'il y a aussi deux espèces de négation de la nécessité, c'est-à-dire la contingence (la négation de la nécessité causale) et le hasard (la négation de la finalité nécessaire). Enfin, KUKI en formule quatre combinaisons suivantes ; (1) Nécessité causale — Nécessité de la finalité (par exemple, le stoïcisme, la position du déterminisme radical, etc.), (2) Contingence — Hasard (l'épicurisme, l'indéterminisme radical, etc.), (3) Nécessité causale — Hasard (le mécanisme universel, etc.), (4) Nécessité de la finalité — Contingence (la théologie chrétienne, le providentialisme, le finalisme radical etc.).

D'après Kuki, Gottfried Wilhelm LEIBNIZ sépare l'idée de la contingence et celle du hasard, et en utilisant de mêmes expressions, Emile BOUTROUX avance sa philosophie, mais cette distinction ne se répand pas. Ǎ première vue, comme le dit KUKI, Henri BERGSON ne différencie pas ces termes, parce qu'il emploie le mot "hasard" de façon ambiguë ; comme non seulement la négation de la finalité nécessaire, mais aussi celle de la nécessité causale. D'ailleurs, au chapitre III de *l'évolution créatrice* il reproche au concept de négation l'origine des illusions et il n'admet pas l'existence du hasard (ni celle de la contingence) non plus.

Il est vrai que BERGSON ne continue pas à employer les mêmes termes que BOUTROUX distingue, mais il adopte l'idée de lui, en cela qu'il donne en partie un rôle important à la combinaison de "Nécessité de la finalité — Contingence". Cependant il préfère nettement "indéterminé" à "contingence" et critique la conception de finalité. Quand on lit soigneusement les textes bergsonienne, il se trouve qu'en effet il trait quelquefois de deux types de la négation de la nécessité (contingence et hasard), sans faire la distinction nominale. On peut constater que le terme de la contingence concerne les problèmes de grande importance pour le bergsonisme ; celui de la liberté (*Essai sur les données immédiates de la conscience*), de la nature matériele (*Matière et Mémoire*) et de l'évolution (*L'évolu-*

tion créatrice), etc. Finalement, nous examinons surtout ces deux points dans cet article. (1) Quelle différence y a-t-il entre la philosophie de BERGSON et celle de BOUTROUX ? (2) Quels usages et quelles fonctions de la contingence sont-elles dans les œuvres de Bergson malgré sa critique envers le concept de la contingence ?

Über die Zweideutigkeit des Wortes „der bloße Begriff" in *Kritik der reinen Vernunft*

für das Verständnis von Kants Transzendentalphilosophie

by

Keita SATO

Part-time Lecturer

Kyoto Women's University

Heute wird das Wort „Transzendentalphilosophie" im allgemeinen als die Bezeichnung für Kantische Erkenntniskritik verstanden, die in *Kritik der reinen Vernunft* durchgeführt wurde, und so auch schon zu seinen Lebzeiten. Aber Kant selbst ist anderer Meinung: erstens ist *Kritik* für ihm nicht die Transzendentalphilosophie als solche, sondern nur ihre Vorbereitung (Propädeutik), zweitens kennzeichnet er sogar die Philosophie seines Kontrahenten (der sogenannten deutschen Schulmetaphysik) als Transzendentalphilosophie. Kurz gesagt, kann dieses Wort zwei verschiedene Dinge bezeichnen, nämlich das Angriffs- und Endziel von *Kritik*. Indessen setzt Kant gar nichts davon auseinander, wie die „wahre" Transzendentalphilosophie sich auf die „scheinbare" bezieht.

Dieser Aufsatz versucht diese Beziehung anhand des Wortgebrauchs „der bloßen Begriff" in *Kritik* klarzustellen. Diesem scheinbar unwichtigen Wort verteilt Kant eine entscheidende Rolle: die Redewendung „aus bloßen Begriffen" charakterisiert die Methode der Transzendentalphilosophie. Dementsprechend hat das Wort „der bloße Begriff" zwei verschiedene Bedeutungen gleich wie die Transzendentalphilosophie. Es bezeichnet nämlich den Begriff bei der deutschen Schulmetaphysik und den bei Kantische Philosophie.

Aufgrund eingehender Analyse wird deutlich, dass das Merkmal der Erkenntnis aus bloßen Begriffen im allgemeinen das Voraussetzen des Begriffs von Gegenstand ist. Mit anderen Worten muss jene Erkenntnis auf den Begriff als Gegebenes angewiesen sein. Aber folgendermaßen scheiden sich zwei Wege der Erkenntnis